

「成人病と妊娠分娩産褥における異常及びリスクファクターとの関連に関する研究」

分担研究：女性の健康から見た母子保健のあり方に関する研究

東京大学

研究協力者 上 妻 志 郎

共同研究者 河 野 弘 子 (墨田区向島保健所)

岩 井 榮 一 (墨田区向島保健所)

【要約】妊娠と成人病との関連を明らかにすることを目的とし、保健所において実施されている成人病健診を受診した中年女性を対象に妊娠分娩歴に関するアンケート調査を行い成人病に関する検査結果と妊娠分娩歴との関連について検討した。

心電図異常を示した群では、妊娠分娩・流産回数が、正常群に比し多い傾向が認められ、また流産や分娩を経験した群は未妊娠群に比しHDLは有意に低値を示し、妊娠・分娩が心疾患と何らかの関連を有することが示唆された。

妊娠中に高血圧を示した群では、現在の肥満指数・血圧は有意に高値を示し、HDLは有意に低値を示した。さらに、産後1年間の間に体重が回復しなかった群でも、肥満指数・血圧は有意に高値を示し、HDLは有意に低値を示した。心電図上ST下降を示したものの頻度も有意に高かった。妊娠中の高血圧と共に、分娩後の体重回復状態が将来の高血圧や脂質代謝の異常と関連を持つことが示され、分娩後の体重管理が保健指導上重要であることが示唆された。

2500g未満の低出生体重児を分娩した群においては、児体重が少なかったほど現在の母体の体重は多く、血圧も高い傾向が認められ、子宮内発育遅延児出産が成人病発症に関連を有することが示唆された。

【見出し語】妊娠・分娩・産褥、成人病、高血圧、HDL、低出生体重児、肥満

【研究方法】東京都墨田区の向島保健所において、実施されている誕生日健診受診者(女性)を対象に、健診日当日に保健所に於いて妊娠分娩に関するアンケート調査を行った。

誕生日健診は35-55才の住民を対象に行われており、検査項目は、身長、体重、肥満度、胸部X線、尿検査(蛋白・糖・潜血)、血圧、心電図、眼底検査、歯科検査、血液検査(白血球数・赤血球数・血色素量・ヘマトクリット・総コレステロール・HDL・中性脂肪・GOT・GPT・ γ -GTP・クレアチニン・尿酸)である。その他に問診項目として、既往歴：高血圧、心臓病(心筋梗塞、狭心症等)、脳卒中、糖尿病、腎臓病、痛風、貧血、肝臓病、高脂血症、高コレステロール血症、結核、その他の有無について、最近1年間の自覚症状：手足のしびれ、めまい、耳鳴り、ふらつき、胸のしめつけ感、息切れ、動悸、脈の乱れ、顔・足がむくむ、よくのどが渇く、よく咳・痰がでる、痰に血が混じることがある、生活習慣：たばこ、お酒、睡眠時間、労働時間、運動、朝食、間食、ジュース類の有無などである。

妊娠分娩に関しては、出産回数、流産回数、胎児の発育、早産の有無、妊娠中の入院の有無、妊娠中毒症の有無、体重の変化について調査した。

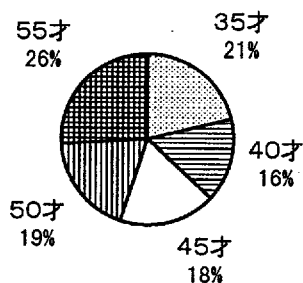
統計学的な有意差検定には student t-test, chi-square test を用いた。p<0.05 を有意差ありと判定した。

【結果】(1) 調査期間中における女性の誕生日健診受診者450名中、443名から回答が得られた。回答者の年齢構成は下図に示すようであった。

(2) 年齢と検査項目との関連 ①年齢と身長—35, 40, 45歳群間には差が認められなかったが、50歳群は若年者に比し有意に低値を示し、55歳群ではその傾向がさらに顕著となった。②年齢と体重・肥満

指数 (BMI) - 体重は35歳群と50歳群間で有意

回答者の年齢構成

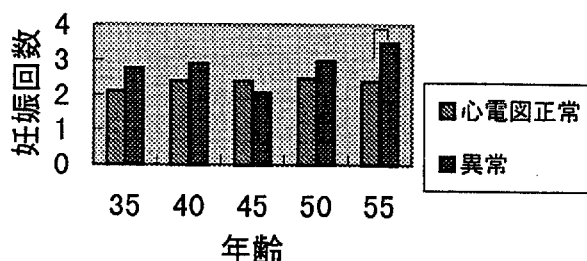


差を認めるのみであったが、肥満指数は50歳群は35・40・45歳群に比し有意に高値を示し、55歳群も同様な傾向を示した。③年齢と心電図異常—35・40・45・50・55歳群でそれぞれ14.6・12.6・15.4・12.2・21.4%に心電図異常 (ST低下、T波平坦、異常Q波、不整脈、R波増高等) が認められた。④年齢と血圧—50・55歳群は他の群に比し有意に高値を示した。⑤年齢と脂質—コレステロール値は50・55歳群で有意に高値を示し、また45歳以上では35・40歳群に比しトリグリセリドは高値、HDLは低値を示した。⑥年齢と肝機能—GOT・GPT・ γ -GTPともに50・55歳群では若年群に比し有意に高値を示した。⑦年齢とクレアチニン・尿酸値—クレアチニンは各群間に差を認めず、尿酸値は55歳群で40・45歳群に比し有意に高値を示した。⑧年齢と妊娠分娩—妊娠回数・分娩回数・流産回数ともに50・55歳群でやや高値を示したが、各群間に有意差を認めなかった。

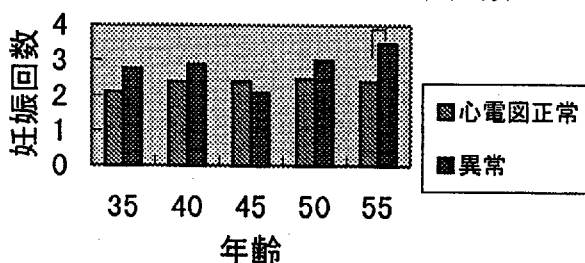
(3) 妊娠分娩と検査項目との関連

①心電図異常と妊娠分娩—45歳群以外では、心電図異常を示した群の妊娠回数は、異常を認めなかった群に比し多く、55歳群では両者間に有意差を認めた。分娩回数についても55歳群においては心電図異常群は有意に高値を示した (図)。一方、流産回数に関しては、35・40歳群で心電図異常群が正常群に比し有意に高値を示した (図)。②血圧・脂質・肝機能等と妊娠分娩—血圧、肝機能等は妊娠分娩回数による差を認めなかった。HDLは未妊婦に比し経妊・経産婦は有意に低値を示した (図)。

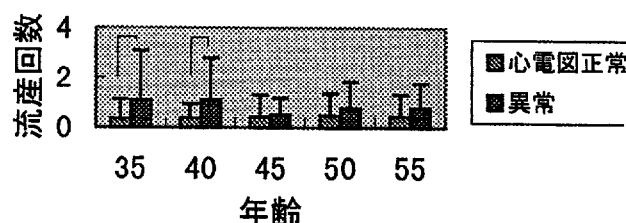
心電図異常の有無と妊娠回数



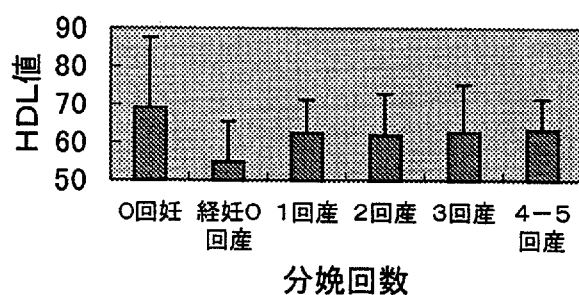
心電図異常の有無と妊娠回数



心電図異常と流産回数



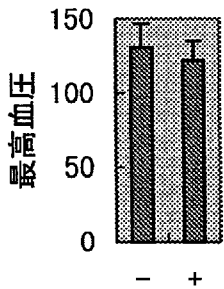
分娩回数とHDL



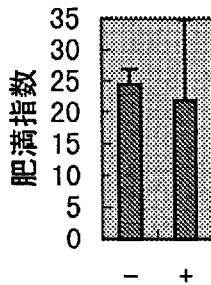
③妊娠中毒症と各種検査項目—妊娠中に高血圧が認められた群 (34例) では認められなかった群に比し、血圧・肥満指数が有意に高値を示し (135.8 ± 22.7 v s 121.6 ± 16.5 , 23.6 ± 2.9 v s 22.4 ± 3.0)、HDLは有意に低値 (57.2 ± 12.9 v s 63.3 ± 14.3) を示し、その他コレステロール・肝機能・心電図異常など

には有意差を認めなかった。浮腫・蛋白尿はそれぞれ42例に認められ、肥満指数のみ有意に高値を示した。④出産後の体重減少と各種検査項目—産後一年間位の間に体重が妊娠前の値まで減少した群と減少しなかった群で比較すると、減少しなかった群では妊娠中の浮腫・高血圧の出現頻度は有意に高かったが、妊娠中の体重増加には差が認められなかった。肥満指数、血圧は体重減少のなかった群で有意に高値を示し、HDLは有意に低値を示した(図)。

出産後の体重回復と血圧

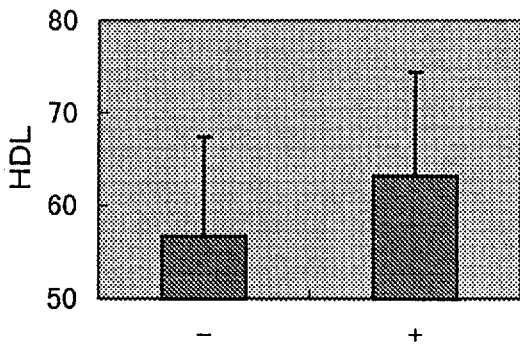


出産後の体重回復と肥満指数



心電図上、ST下降を示したものの頻度が体重減少のなかった群で有意に高かった(20.0% vs 3.7%)。その他の項目については有意差を認めなかった。

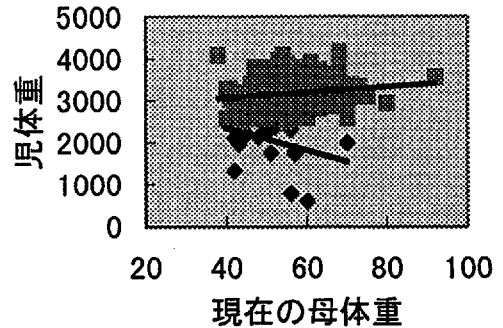
出産後の体重回復とHDL



⑤第一子出生児体重と各種検査項目—2500g未満(30例)とそれ以上(252例)の群間の比較では、血圧・肥満指数・コレステロール・HDL・心電図異常・肝機能等には有意差を認めなかった。児体重と妊娠前の母体の体重との関連を両群で見ると、2500g以上では正の相関を認めたが、2500g未満では相関を認めなかった。

児体重と現在の母体の体重との関連を見ると、2500g以上では上記結果と同様に正の相関を認めたが、2500g未満では負の相関を認めた(図)。

児体重と現在の母体重



血圧・HDLについて同様な検討を行った。血圧・HDLともに2500g以上群では児体重との相関を認めなかったが、2500g未満群では血圧は負の相関を、HDLは正の相関を認めた。

【考察】虚血性心疾患は、多産婦や流産回数が多い女性に多いという報告があるが、今回の結果も心電図異常やHDL低下などと妊娠分娩・流産との関連が示唆された。

妊娠中毒症の中でも高血圧が認められた場合や産後の体重回復が不良であった群では、肥満・高血圧・HDL低下・心電図異常などを起こしやすく、ハイリスクグループであると考えられた。また、高度の子宮内胎児発育遅延が認められた場合も、将来、肥満・高血圧になりやすいという傾向が認められた。

今後さらに例数を増やして、検討していく予定である。

アンケート調査にご協力いただいた向島保健所の久我一代氏、林祐子氏、植村エツ氏、村山朗子氏、三浦清美氏、土岐真弓氏、川井田久美氏、武田なよか氏、山本久子氏、小俣雪恵氏、松下明子氏、篠原陽子氏、高橋涼子氏、越智雅子氏、植本智代氏、並びに統計処理にご協力いただいた東京大学産科婦人科学教室千葉理奈氏に深謝いたします。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】妊娠と成人病との関連を明らかにすることを目的とし、保健所において実施されている成人病健診を受診した中年女性を対象に妊娠分娩歴に関するアンケート調査を行い成人病に関する検査結果と妊娠分娩歴との関連について検討した。

心電図異常を示した群では、妊娠分娩・流産回数が、正常群に比し多い傾向が認められ、また流産や分娩を経験した群は未妊娠群に比しHDLは有意に低値を示し、妊娠・分娩が心疾患と何らかの関連を有することが示唆された。

妊娠中に高血圧を示した群では、現在の肥満指数・血圧は有意に高値を示し、HDLは有意に低値を示した。さらに、産後1年間の間に体重が回復しなかった群でも、肥満指数・血圧は有意に高値を示し、HDLは有意に低値を示した。心電図上ST下降を示したものの頻度も有意に高かった。妊娠中の高血圧と共に、分娩後の体重回復状態が将来の高血圧や脂質代謝の異常と関連を持つことが示され、分娩後の体重管理が保健指導上重要であることが示唆された。

2500g未満の低出生体重児を分娩した群においては、児体重が少なかったほど現在の母体の体重は多く、血圧も高い傾向が認められ、子宮内発育遅延児出産が成人病発症に関連を有することが示唆された。